秋田大学

日本語・日本文化研究論文

日本社会における LGBT に対する認識と透明化のプロセス

秋田大学教育文化学部

アマルギオアイレ・ディアナ・エレナ

指導教員：市嶋　典子　先生

目次

１．　はじめ…… 3
２．　　ＬＧＢＴとは何か？…… 3
２．１．なぜＬＧＢＴなのか…… 4
２．２．日本はＬＧＢＴの人に寛容なのか…… 5
３．2015 年に行ったアンケート調査の分析…… 7
４．日本における LGBT の人の歴史的な状況……12
５．松浦大悟氏とのインタビュー……14
５．１．インタビュー対象者……14
５．２．インタビュー対象者選択理由……14
５．３．インタビュー方法……15
５．４．インタビュー日時……16
５．５．インタビュー内容……17
６．結論……28

日本社会における LGBT に対する認識と透明化のプロセス

１．はじめに

20 世紀になると、「ジェンダー」や「セクシュアリティ」という概念をめぐって様々な理論が主張された。その理論の中から、ジュディス・バトラー（1999）の「ジェンダー・トラブル」は一つの最も影響がある論文である。ジュディス・バトラー（1999）によれば、ジェンダーはセックスと同様にソーシャルフィクションだということである。つまり、人間の性と性行為は各々社会に作られた物語である。

この定義に基づき、筆者は、ある社会ではどのようにこの二つの概念を構造するのかを考察するのはきわめて興味深いと考える。のみならず、異質的だと思われる物、すなわち同性愛、との接触する時、その社会における反応を研究するのも非常に価値があると言える。そこで、本稿では日本社会のＬＧＢＴに対して態度について考察していきたい。

２．ＬＧＢＴとは何か？

論を進める前に、ＬＧＢＴや同性愛などの言葉の意味を明確にする必要があると考える。以前述べたジュディス・バトラー（1999）の理論に戻ると、「ジェンダー」と「性行為」は社会に作られた概念であることだと述べている。この主張に基づき、バトラー（1999）は「女性らしさ」と「男らしさ」は人間の体の自然な特徴ではなく、「フェミニン」と「マスキュリン」という資質は社会に決定されたものであると論じている。

このように考えると、「女」と「男」の定義は社会によって違うと言える。他の言葉で言う場合、「女」と「男」という概念は一定的な定義はない。それで、「同性愛」と「異性愛」を明確にするのは難しくなると考える。では、どのように定義すればいいだろう。薬師等（2014）によれば、セクシュアリティとは、「からだの性」、「こころの性」と「好きになる性」の三つの要素を指す。この三つの要素を英語で言い換えると、「セックス」、「ジェンダーアイデンティティー」と「セクシュアルオリエンテーション」になる。

さらに、薬師等（2014）によると、ＬＧＢＴは「レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの４つの言葉の頭文字を併せた言葉」だということである。これらの用語一つ一つみていくと、レズビアンは「＜こころの性＞が女性で＜好きになる性＞も女性の人」、ゲイは「＜こころの性＞が男性で＜好きになる性＞も男性の人」、バイセクシュアルは「＜好きになる性＞が異性の場合も、同性の場合もある人」、トランスジェンダーは「＜からだの性＞と＜こころの性＞が一致しないという感覚」と定義されている。なお、一般的に用いられる「同性愛」は「ゲイ」と「レズビアン」の二つの意味を含む。

この定義はこころの性とからだの性は同じだと言わない。逆に、個人は自分でこころの性を自由に選択できることを示唆する。それで、筆者は以上述べたＬＧＢＴと同性愛の定義はジュディス・バトラーの理論と即すると考えるため、本稿では上記の定義にのっとり論を進める。

２．１．なぜＬＧＢＴなのか

本論に入る前にこのテーマを選択した理由について述べる必要があると考える。まずは、筆者は欧州にある国（ルーマニア）の出身であることを言わなければならない。また、キリスト教のもと育ってきた。そのため、幼い頃からＬＧＢＴと言う概念は悪いイメージがあるのは分かっていた。ルーマニア社会における同性愛の悪いイメージの原因を説明すると、ルーマニアの歴史の中を探らなければならないと考える。

そうすると、現代のルーマニア社会は、いまだ共産主義時代（1947―1989）に強く影響されていると分かるようになる。では、その影響は何なのだろうか。Coleman と Standfort（2005）は、共産主義時代に政府は国民の私生活、性的な事柄も含み、強く規定していたということを述べている。この政策の最も深刻な例は中絶を禁止する法律である。簡単に言うと、出生率を上げるように、避妊方法や中絶するのは全く禁じられていた。非公式中絶の可能性があったけれど、警察に見つけられた場合は、医者も妊娠している女性も、厳重に罰された。換言すれば、ルーマニアの共産主義政府は生殖を推進していたと言えるではないだろうか。それで、コミュニズム的なルーマニアにおける思想に性的少数者の存在は打ち消されていた。つまり、「ルーマニアには、同性愛者は全くない」という考え方は強く広がっていた。

のみならず、同性間の性行為は法的規制であった。Herzog（2011）は、ルーマニアの共産主義時代が終えん後（1989）、中絶することと避妊方法は解禁されたということを述べている。一方、Herzog（2011）は同性間の性行為の法的規制は 1996 年まで続いたという状況を表す。その時に、ルーマニアは欧州連合、いわゆるＥＵに入るため、周りの国（特にブリュッセル）に圧力をかけられ、法律が変わった。また、2002 年に同性者に対する性交許諾年齢は 15 歳に規定された。

以上、ルーマニアにおける共産主義時代の影響やルーマニアの同性間の性行為の法的な犯罪化などについて述べた。この例を使いつつ、どうして筆者はルーマニアはＬＧＢＴに対して、否定的な発言があることだと強く感じた理由を説明したかった。

以前述べた状況で、筆者は 12 歳ぐらい時に偶然テレビに放送されていた「グラビテーション」と言う日本の少年愛アニメを見た。グラビテーションの主人公、有名な歌手になりたい、新堂愁一は小説家の由貴瑛里と好きになる。様々な苦労し、結局二人は付き合い始め、幸せになる。

前に論じたように、ルーマニアの同性愛に対して否定的な圧力を強く感じた筆者はその時まで、「グラビデーション」のような、はっきり同性愛者についてあつかったテレビ番組はルーマニアの主流なメディアで全く見たことはなかったためとても不思議だと考えた。このアニメを見た後、日本はルーマニアより、同性愛に対して寛容な国であると意識し始めた。

後に、筆者は大学で日本語授業で調査をする課題をした。12 歳の時を見たアニメについてを考えつつ調査の話題に対して他の同級生と話した。相談した後、５人のグループの中に同性愛者について日本人の意見のアンケート調査を作ることになった。その調査の質問に答えた人の数は２１３人であった。

全体的にアンケート調査の結果は日本人はＬＧＢＴに対して寛容な態度があることであった。さらに、最も驚いたのは「同性結婚を受け入れますか」という質問に対し、「受け入れます」という答えを選んだ者が約 7 割を超えたことでる。

２．２．日本はＬＧＢＴの人に寛容なのか

以前見た「グラビテーション」というアニメとこの調査の結果からすると日本はやはり同性愛に対する寛容な態度があるという仮説を立てる。そうすると、同性愛に関して

日本はなぜ寛容だろうかということは興味深いポイントになると考える。そうではないなら、すなわち日本は寛容ではないなら、なぜ寛容に見えるのかも興味深い。そこで、本稿では、文献を参考しつつ、または、松浦大悟氏という LGBT の政治家にインタビューし、なぜ日本社会はＬＧＢＴに対して寛容に見えたのかの答えを探す。

では、寛容な社会は何だろう。本稿では筆者の定義をあげると、LGBT にとって寛容な社会は、同じ権利を挙げる法律的な社会以外に、性的少数者としてカミングアウトをしたとしてもと仕事や学校では差別に遭わない社会である。また、寛容な社会とはテレビや様々なメディアで LGBT の人が表に出ることができる社会である。言い換えると、テレビでも、他のメディアでも、性的少数者の人々の意見や考えが明確に表現できる社会である。本稿ではこの観点から性的少数者に対して日本社会の態度を考察していきたい。

今後は、本論に入る前に 2015 年に行ったアンケート調査をもう一度分析する。

３．2015 年に行ったアンケート調査の分析

このアンケート調査は日本語授業の課題であったため目的は、ある話題について、筆者のグループの場合は「同性愛者について日本人の意見」という話題、日本人の意見を聞きつつ、日本語を練習することであった。また、グループ課題であったため、グループメンバーの名前を書く必要があると考える。筆者はアンドラ・トマ、デゥミトレスク・アンドレエア、カリン・ローラ、トアデル・ラウラ、バニカ・ロレナと一緒に調査を作った。本稿では、筆者はこのアンケート調査を使う許可はグループメンバーの全員からもらった。または、以降にある図は、本稿のため筆者が作った図である。

調査の仕方として、行った時に筆者と他のグループメンバーは全員ルーマニアにあったためで、インターネットを使いつつグーグルフォームを使用した。また、回答者はまずグループメンバーの日本人の友達であり、その日本人の友達はアンケート調査を自分の友達に送り、結局２１３の回答が集まった。

まずは、回答者はどんな人なのかについて述べなければならない。アンケート調査に答えた人は全員日本人で、日本のどこの出身かのデータはない。以下にある図２に回答者の性を示し、図３は答えた日本人の年齢を表している。

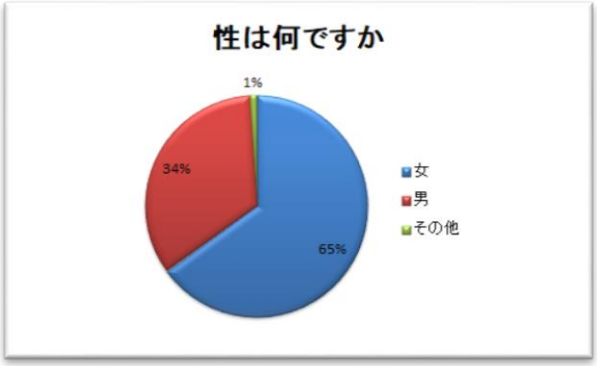


図２調査における性別の割合

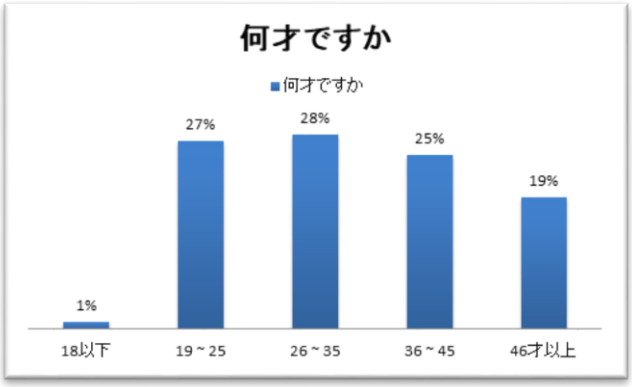


図３調査における年齢の割合

図２において、女性は 65%（138 人）であり、34%（72 人）は男性になっていた。この質問に答えた人の性は 1%（2 人）は「その他」となっている。図３を見ると、多数の回答者は「26～35 歳」、「19～25 歳」のカテゴリーにあり、すなわち「26～35 歳」という答えは 28%（60 人）であり、「19～25 歳」は 27%（56 人）になっている。ま

た、「46 歳以上」の回答数は 19%（41 人）になり、「18 以下」の人の割合は 1%（2 人）である。つまり、アンケートに参加した人は様々な年齢の成人であると言える。

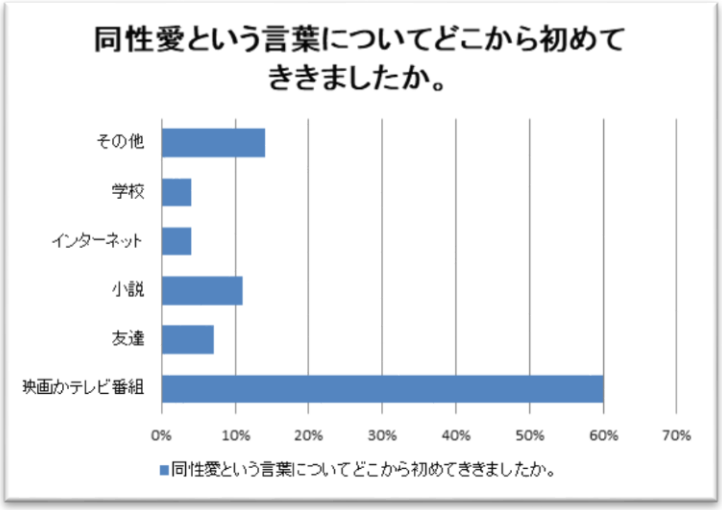


図 4「同性愛」を初めて聞いたところの割合

図 4 に「同性愛という言葉についてどこから初めて聞きましたか。」と言う質問の答えをまとめる。「映画かテレビ番組」を選んだ人は 60%（127 人）に達していた。一方、「インターネット」と「学校」と言う答えは同じ割合であり、いわゆる 4%（8 人）にすぎない。残りの答えは、「その他」というのは 14%（29%）であり、「小説」は 11%（24 人）になっており、「友達」は 7%（15 人）になっていた。このことから、日本人の同性愛のイメージはメディアに影響されていることが分かる。つまり、日本人のＬＧＢＴのイメージはテレビ番組や映画などの中に現れる登場人物なのだろう。または、テレビで、このようにはっきり同性愛についての映画とテレビ番組が放送されるのは寛容な態度を表すと考える。

図 5 は「社会の中で同性愛を見るとどう思いますか。」という質問の答えを示している。「構いません」というのは 68%（145 人）にも及ぶ。「違和感を感じます」を答えた人は 17%（36 人）であり、「分かりません」は 4%（8 人）となっており、「してはいけないことだと感じます」は 2%（4 人）である。「いいことだと思います」の答えの割合は 1 割（18 人）にも満たない。

2015 年この質問の答えの分析はやや違った。その時に、「構いません」は「ニュートラル」という意味があることだと考えた。そこで、この質問で寛容な態度がある日本人の割合は約 8

割という結果があるという分析した。今は「構いません」というのは「無関心」に近づく傾向があることだと考える。つまり、社会の中では、すなわち日常生活では、同性愛者について多数の回答者はさほど考えたことはなかった。

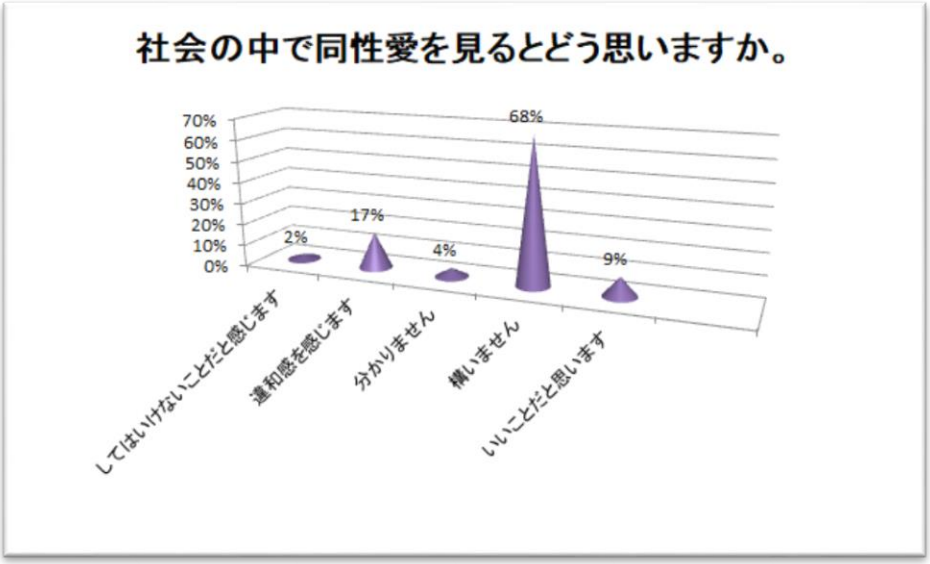


図 5　日本社会における同性愛者に対して考え

その意味を選んだ理由は、「構いません」や「分かりません」という用語の意味は今まで、つまりアンケート調査に答える時まで、LGBT という話題について回答者は考えたことはなかったと示唆すると筆者は考えているためである。このような回答者の考え方の原因は性的少数者は自分の生活と離れているから、つまり社会の中ででさほど接触したことはなかったためで同性愛者と接触するのは想像できない。

このような筆者は考え方がある原因は松浦大悟とのインタビュイーの内容を分析しつつ発見した日本社会における LGBT の透明化という現象と繋がるため以降の本稿の章でははもっと詳しく述べる。

図 6 に「家族の中に同性愛者がいたらどうと思いますか。」における質問の回答を表す。「構いません」という答えは 48%（101 人）に達し、「分かりません」は 28%（59 人）に至る。つまり、以前の質問と同様に無関心の態度がある回答者の割合は全体の約 8 割を占める。一方、「賛成します」は 18%（38 人）であり、「反対します」は 6%になっていた。

すなわち、自分の家族と関係ある場合、同性愛に対しての態度はきわめて無関心になることがわかる。のみならず、以前の質問の答えも見ると、自分の周りの人と関係あれば（家族のみ

ならず）、日本人は今までこのような文脈で同性愛者についてさほど考えたことはないという傾向があることが分かるようになる。

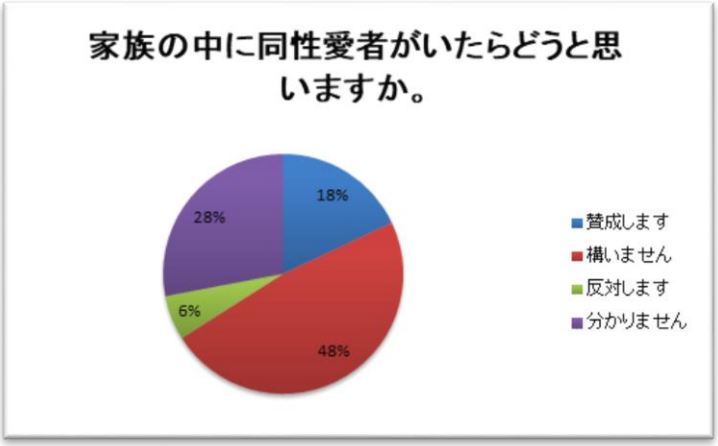


図 6 家族の中に同性愛者がいる場合に対して考え

以下にある図 7 は「同性結婚を受け入れますか」という質問の答えを示したものである。「はい、受け入れます」という答えを選んだ人の割合は 74%（158 人）にも達する。「関心がありません」は 19%（40 人）であり、「いいえ、受け入れません」は約 1 割にも満たない。これより、日本人は同性結婚に対してほぼ寛容な考え方があるということがうかがわれる。

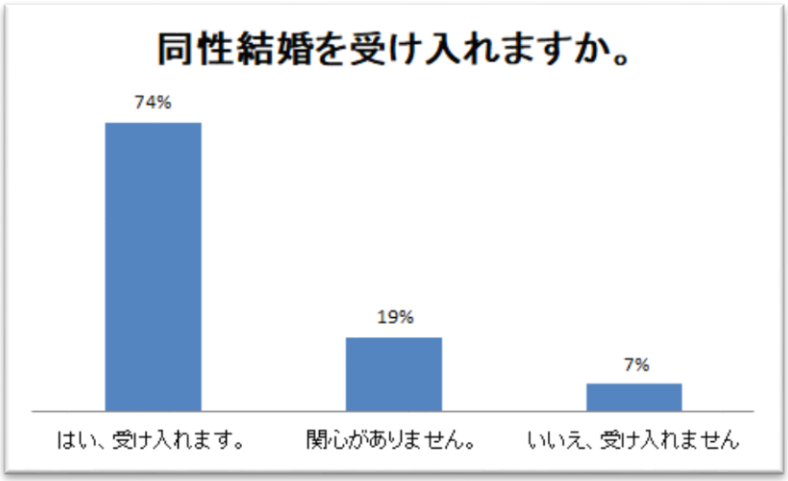


図 7 日本人同性結婚に対して考え

これにより、同性結婚について考えれば、アンケート調査に答えた日本人はほぼ寛容な態度があると言える。のみならず、日本の映画やテレビ番組はＬＧＢＴという概念は

話題にする。しかし、話題は自分の周囲の人々や自分の家族になる場合、同じ回答者の態度は無関心になる。

回答者は自分と関係ない場合、例えば同性愛結婚が受け入れらるかどうかということだったら、多くの回答者は寛容な答え、いわゆる「受け入れられます」を選んだ。一方、自分と関係ある場合になる、例えば、家族は LGBT だったら、または周りにいる人は LGBT の人だったら、回答者の考えや態度は不明確になる。つまり、自分の周りにいる人は LGBT、または自分の家族は同性愛者だったら多くの回答者はどんな考えになるかという質問に「構いません」や「分かりません」という曖昧態度を表す答えを選んだ。

４．日本における LGBT の人の歴史的な状況

今後は、アンケート調査の結果を説明していきたい。日本社会は本当に寛容なのだろうかと言う質問の答えを見つけるように、まずは日本の歴史を論じる必要があると考える。次に、日本歴史の中に同性愛はどんな状況にあったのか、後は、今の日本社会はその状況にどのように影響されたかについて述べる。

Mclelland（2000）によると徳川時代（1603―1867）の幕府は同性愛に対して特に寛容な態度ではなかったが、その時代における男性間の同性愛（男色）についての文書は世界史の中からの最も詳しい文書である。つまり、徳川時代（他の名前で、江戸時代）の文学や絵など、いわゆる芸術の中に男色は良く表された。その時代の芸術が表していることは、同性間の性行為は侍の間、坊さんがいる寺と歌舞伎の芸能者のサークルの中に良くあった。徳川時代は同性間の性行為を反対する発言はなかったため、このような関係は名人と弟子の間に良く起った。実際に、侍の場合は男色のような関係は異性愛より優れていた。

または、Mclelland（2000）は、江戸時代の男色の伝統は非常に広がったが、同性間の性行為をする人々は同性愛のアイデンティティーがあると思われなかったと述べる。つまり、その時代のセクシュアリティの理想はアイデンティティーとさほど関係なかった。

つまり、この男色は性的なアイデンティティーを表すことより、一つの性的な経験として考えられた。のみならず、この男色における性行為は世間の関係を映じた。これは、簡単に言えば、以上述べたように、このような関係は名人と弟子の間に良く起こられたというのは、年上と年下の相手であり、その二人の中に主動的な相手は年上の人、つまり名人の人で、受動的な相手は年下の人、つまり弟子である。近代の関係に通訳すれば、先輩と後輩のような関係になる。この関係は規定的な文脈とルールにおける関係である。

明治時代（1868－1912）になると日本は西洋に大きく影響され、同性愛に対しての新しい発言が生まれた。そのため、徳川時代の同性間の性行為が良く記録される伝統は消えた。または、この西洋からの影響は同性間の性行為は法的に犯罪になった。しかし、男色の伝統は軍隊と大学の中に生き残り、実際に処罰の対処になった同性愛のケースはほとんどなかった。

以前述べたことから、日本は、他の国々と違い、同性愛の伝統の長い歴史があるということが明確になる。しかし、この同性の間の性行為は個人のアイデンティティーと関係なく、ただのエロチックな経験として考えられた。のみならず、その性的な経験は現在の世間と同じルールを使った。さらに、鎖国時代とその時代が終わった後、世間における同性愛に対しての考え方は明確に変わった。このことは、明治時代の西洋における理想が輸入されたためであると言える。明治時代に、日本における、同性愛という概念は欧米における様々な発言に影響された。

もう一つ明確になることは、日本の歴史の中で、同性愛というのは男性と関係あることのみだと考えられた。レズビアンを表す同性愛の言葉や文書などはさほどない。日本の歴史では、セクシュアリティというのは、男らしさと関係ある概念である。他の言葉にすると、男性のみはセクシャルアイデンティティーを持つことができると考えられた。

戦後に、「ゲイブーム」という現象が見られる。つまり、この時にメディアは同性愛という話題に対して大変興味を持つようになり、様々な映画やドラマや小説などが表れた。けれど、このＬＧＢＴメディアの消費者は同性愛者ではなく、女性だった。

５．松浦大悟氏とのインタビュー

歴史の中の状況はこのようになっている。つまり、江戸時代の男色という概念は明治時代以降は西洋の影響のため社会の問題になった。または、90 年代のゲイブームもあり、同性愛者についてテレビ番組やドラマが多く作製された。では、現在の状況はどうだろうか。今の状態を明確するために、本稿の筆者はＬＧＢＴの松浦大悟氏という LGBT の政治家とインタビューを行った。

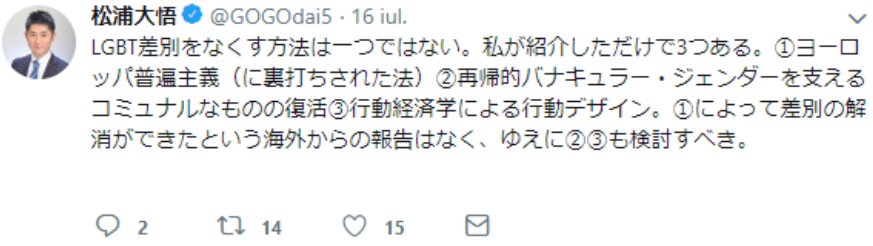
５．１．インタビュー対象者

松浦大悟氏は広島出身であり、神戸学院大学の法学部を卒業した。卒業した後は 1992 年から 2006 年までアナウンサーとして秋田放送で努めた。2006 年に退職し、2007 年に無所属で第 21 回参議院議員通常選挙に出馬し、当選した。後は、2016 年と 2017 年にも選挙に参加したが、二つの場合も落選だった。

さらに、松浦大悟氏のカミングアウトを巡って様々な新聞記事がある。藤沢（2017）によると、2017 年の選挙後彼は自分が選挙前カミングアウトしたかったが、秋田では（その時は秋田代表として選挙に出馬した）できなかった。同じ新聞記事の中に、東京都知事の小池百合子にカミングアウトする許可をもらったが、秋田ではカミングアウトしないほうがいいということが言われた。筆者はこの事件の状況を明確するのは興味深いと考えた。なぜかというと、このような事件は日本の地方と日本の都会の寛容さを表す可能性があると考えたからだ。

５．２．インタビュー対象者選択理由

松浦大悟氏にインタビューすることを決めた理由は、彼のツイッターを見ると松浦氏の LGBT についての立場が明確であるからである。メディアに LGBT に関して問題がある時に松浦大悟氏はその問題について自分の意見とその問題の解決する方法を積極的に論じている。それは 7 月 16 日にツィーターに掲載された入下のメッセージからもうかがえる。



LGBT 差別をなくす方法は一つではない。私が紹介しただけで 3 つある。①ヨーロッパ普遍主義（に裏打ちされた法）②再帰的バナキュラー・ジェンダーを支えるコミュナルなものの復活③行動経済学による行動デザイン。①によって差別の解消ができたという海外からの報告はなく、ゆえに②③も検討すべき。

（松浦大悟、2018、ツイッター）

日本における同性愛者差別に対して解決方法についてを論じている。松浦氏によれば、差別のない社会を作るため、一つの方法のみはなく、「ヨーロッパ普遍主義」や「再帰的バナキュラー・ジェンダーを支えるコミュナルなものの復活」や「行動経済学による行動デザイン」の三つの解決方法をあげる。以上のように筆者は松浦大悟氏 LGBT の政治家、または、元アナウンサーの日本社会における性的少数者に対する態度についてインタビューするのは大変興味深いと考える。

５．３．インタビュー方法

インタビューは半構造インタビューを行った。インタビューを行う前にいくつかの質問を準備し、インタビューをしつつ、話の流れにより他の質問も聞いた。インタビューの前から準備した内容は以下の通りである。

都市と田舎は差がある。松浦大悟さんの経験について

（秋田ではカミングアウトできなかった事件）

5 年前はそのようだったが（秋田ではＬＧＢＴへの理解を得るのは難しいと判断し、希望の党の風に乗ってとにかく議席を得ることを優先したが、同党の失速で果たせなかった。＊カミングアウト＊）、今はどうですか。

地方における LGBT の「生き辛さ」は何ですか。（東日本大震災では、ＬＧＢＴが『気持ち悪い』といわれて避難所で排除されたり、ホルモン注射を処方してもらえなかったりといった問題について読んだことがある）

ＬＧＢＴを受け入れられない原因は何だと思いますか。

地方はＬＧＢＴにとってどんな雰囲気ですか。

ＬＧＢＴにとって住みやすい地域作りとは何ですか。今の状況は何ですか。

ＬＧＢＴに対して寛容な社会は松浦さんにとってどんな社会ですか。

都市にはＬＧＢＴが「隣に普通にいる人」ということはニュース記事で読んだことがあるがこのことは都市ではＬＧＢＴの人は差別されないという意味がありますか。

参議院議員の経験について

法律的に日本はＬＧＢＴにたいしてどのようなことが実現ができていましたか。また、何がまだできていませんか。

今のところはどんな法律が必要ですか。

国会の人は松浦さんの活動にたいしてどんな態度を取りましたか。

メディアにおける差別

ルーマニアで作った調査を見ると日本人は結構同性結婚を受け入れられる傾向があり、多数のアンケート回答者はテレビ番組や映画から同性愛という言葉をはじめて聞いたという結果がでた。その理由で、私は日本のメディアでは性的少数者がよく見られる（日本のメディアはこの話題を検閲されない）と思いました。本当はどうですか。

今のメディアにおけるＬＧＢＴはどんなイメージがありますか。

ルーマニアではあまりテレビにＬＧＢＴと関係ある番組は見られない、日本はこの意味で寛容ではありませんか。

松浦さんは秋田放送でＬＧＢＴの問題を取り上げる番組を作製したことがありますね。その番組はどんな番組でしたか。視聴者からどんな反応もらいましたか？

５．４．インタビュー日時

6 月 27 日に秋田大学の図書館で松浦大悟氏と会い、1 時間半ぐらいインタビューした。インタビュイーを録音し、たよで文字化した。松浦大悟氏に本論で使う許可をもらった。

５．５．インタビュー内容

松浦大悟氏とのインタビューの中で、ＬＧＢＴに対して、現在の日本社会における態度のいくつかの傾向が見えるようになった。以後、インタビューを分析する中で生成した概念、カミングアウトの難しさ，ＬＧＢＴの人の透明化，メディアに作られた同性愛者のイメージ，歴史の影響について論じていきたい。

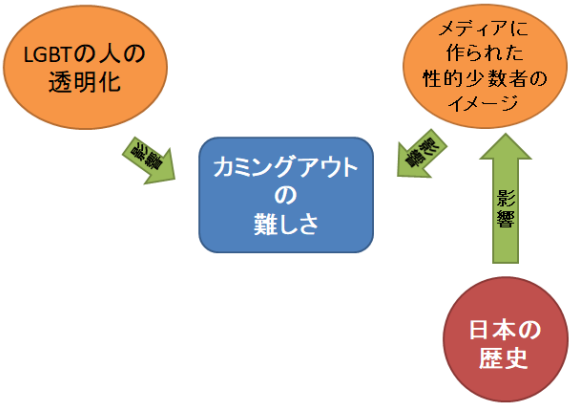


図８日本における状況

図８は以前述べた日本社会における傾向を示している。一番目明確になる概念は日本社会に LGBT の人の難しさである。カミングアウトの難しさは二つの原因がある。LGBT の人の透明化とメディアに作られた性的少数者のイメージである。さらに、メディアに作られた性的少数者のイメージは原因として日本の歴史が出てくる。

ア．カミングアウトの難しさ

松浦大悟氏とのインタビューの内容から、すぐ昭然になったことは、日本社会の場合は同性愛者はカミングアウトしづらいという話が極めて多いということである。

政治家としてカミングアウトすること

カミングアウト時における困難の例を挙げると、松浦大悟氏の選挙にカミングアウト臨んだ話について述べる必要がある。松浦氏は 2007 年の選挙に出馬した時に、無所属であった。しかし、民主党、社民党と労働組合の団体連合、二つの政党と一つの団体は松浦大悟氏を支援した。その三つの中から民主党の党首、小沢一郎に松浦大悟氏はカミングアウトについて相談し、以下のような話になった。

カミングアウトをして選挙に臨みたいということを相談したんです。で、そうしたら、それはだめだということを言われました。なぜならば、まだ、あの、地方では、そういう状況にはないと。カミングアウトして選挙をやることによって票を減らすよりもあなたはアナウンサーだったんだから、そのさわやかなイメージのままやってくれということ言われました。

（松浦大悟、2018）

松浦氏は、選挙にでること臨んだが、できなかったと述べた。ＬＧＢＴの人としてより、アナウンサーのイメージは選挙のため、もっとも適切であり、同性愛者として選挙に出馬すると票が減るということを言われた。のみならず、「地方ではそういう状況はない」という言及は地方と都会の間の差異が存在する可能性を示す。

インタビューの内容からは松浦大悟氏は何回も同じこと言われていることが分かる。次の 2016 年の選挙に参加した時、秋田では、以下の事件があった。

秋田県の現職の国会議員の方にお会いした時に、面と向かって、「あなたが男性を好きだということは聞いてます。」と。で、「同性愛者のあなたが秋田の代表になるのはふさわしくないから候補者を降りてくれないか」って言われたんです。

（松浦大悟、2018）

「地方ではそういう状況はない」という言葉は秋田ではＬＧＢＴの人は秋田の代表になることができず、または同性愛者を代表にする場合は「ふさわしくない」という地方にいる人々の考え方を示すだろう。または、この二つの例は、まず 2007 年と後は 2016 年に起こったことなので、9 年間に状況はほぼ変わらなかったことを示す。しかし都会では状況はどうか。

前述した、秋田支局長の藤沢志穂子（2017）が書いた新聞記事の内容によると、松浦大悟氏は都会ではカミングアウトは大丈夫だと言われ、秋田の人々と違って、小池百合子、東京都知事から許可をもらった。そこで、本稿の筆者はインタビューの時にこの状況について聞いた。松浦大悟氏はこのように答えた。

で、都会でもカミングアウトしても 50%近くが失敗をしてるんですよ。親や仲間、どれも切られたり、家から追い出されたり、あの、そういう状況があるので、あの、カミングアウト至上主義で「カミングアウトすればバラ色の世界が訪れるんだよ。新たな関係性が構築できますよ」というのは嘘だと思います。

（松浦大悟、2018）

一般的な人としてカミングアウトすること

つまり、日本社会が寛容だというイメージを作る傾向があるが、現実はやや違う。以前述べたような記事はそういう寛容な都会のイメージを作る傾向があるが、政治家の方のみまらず、一般的な人々もカミングアウトしたいと様々な意味で、容易ではない。最近のニュースを見ると具体的な例として、2016 年に、一橋大学の学生が自殺したという話が浮かびあがる。永易至文（2016）によると、彼は友達に告白し、その友達は line モバイルのグループチャットで、他の 5 人に言ってしまった。そこで、LGBT の大学生は、何をしたほうがいいか分からないためで、自殺の方を選んでしまった。

このような話はニュースで多く現れる傾向がある。永易至文（2016）は同じ記事の中では多数の研究や記事は日本社会の寛容な態度について議論しながら、彼はこのように述べている。

性的マイノリティーのほとんどは、自己がそうであることを固く秘め、周囲の反応におびえて日々を送っている。社会的サポートと巡り合うこともまれであり、そもそもサポート資源がほとんどない。社会的排除と孤立感にたたずみ、希死念慮も高いといわれる。

（永易至文、2016）

これは、日本社会におけるＬＧＢＴの人の状況は寛容という概念とは正反対の内容である。多くの同性愛者は自分のアイデンティティーを隠す必要があると感じる人の数が多い。のみならず、カミングアウトする場合も、資源が足りないため社会からサポート

もらう可能性がない場合が多い。それゆえに、ＬＧＢＴの人々は自殺する可能性について考えてしまう場合がきわめて多い。

地方と都会の状況

カミングアウトのしづらさの現象のもう一つの例は、松浦大悟氏によると、秋田の現在の状況にある。いわゆる、秋田では、ゲイバーは一軒もないが、ゲイバーはないというのは作られないためではなく、一度作られた後に、倒産してしまうからである。これはなぜかというと、お客さんがこないためである。お客さんが来ない原因として、は松浦大悟氏はこのような事件を一つの例を挙げる。

> で、あの、以前、まあ、10 年以上前の話ですけど、ゲイバーがあった時のことですけど。私がそのゲイバーに行ってたんですよね。そうしたら、あの、いきなり、ドアがバッタンと開いて、「何とかちゃんいるか」って言って、酔っぱらいのおっさんが、あの、ニャニャしながら、店内見まわすんです。明らかに、誰がこういう所には来てるんだろうというパトロールなんですよ。で、あの、そういうことがあれば安心して飲んでられないんですよね。ゲイの人達。そういうこともあって、あの、秋田にはゲイバーがないいんです。
>
> （松浦大悟、2018）

しかし秋田に起こっている「顔ばれ」や「酔っ払いのおっさんのパトロール」などのような事件は地方にとって地方における LGBT の代表的な事件ではなく、秋田の一側面である。松浦大悟氏によると、他の市を見ると、現在はほとんど違う。

> 岩手県の盛岡には、ゲイバーが 6 軒があります。青森には、2 軒があります。それで、あの、ＬＧＢＴパレード、えっと、レインボーパレードも、青森では 5 年前からやってます。6 月 24 日にありました。岩手では、今年初めて、9 月にあるんですね。で、北東北で、あの、レインボーパレードがないのは、秋田県だけになってしまいました。
>
> （松浦大悟、2018）

松浦氏によると、秋田についてこのように述べている。

> 秋田の特徴として、だから、それは、あの、青森と岩手とも違うっていうことなんですよね。秋田だけやはり、突出して、まあ、なんというか、恐れる社会というか。裏を返せば、まあ、あの、なんというんですかね、その人と人との繋がりがあまりにも、深すぎて、あの、オープンにできない社会、オープンにすれば、親や兄弟に迷惑をかけると思うんじゃないですかね。
>
> （松浦大悟、2018）

秋田と他の市の違いは大きさや人口などである。つまり、顔ばれの可能性、秋田は小さく、「人と人の繋がりがあまりにも、深すぎ」ため、「オープンにできない社会」になるだろう。

上記で述べたことから、日本ではカミングアウトするのは難しいと思われる。このことから、日本社会は寛容な社会であるとう仮説は現実ではないということが明確になった。本稿では、寛容さを表す一つの要素として性的少数者はカミングアウトをすると仕事や学校では差別に遭わない社会であるという要素を選んだ。この観点で松浦大悟氏とのインタビューの内容を考察すると政治家としてＬＧＢＴの人はふさわしくないとみなされることや地方ではＬＧＢＴの人は代表になる状況はまだないことなど話が見られる。のみならず、メディアは現実と違うイメージを作る。つまり、政治家としてカミングアウト許可もらったことまたは一般的な人として、カミングアウトしてもいい。のみならず、カミングアウトをするのは安全だとメディアで言われる。しかし、松浦大悟氏は一橋の大学生の例を挙げたようにこの発言は人を傷つけたこともある。

イ．ＬＧＢＴの人の透明化

では、そういう状況はなぜおこだろうか。どうして日本社会における文脈、カミングアウトするのは難しいと感じる個人の数が多いのか。

日本における LGBT の人に対する差別

松浦大悟氏とのインタビューの内容からこの疑問の答えの一つが見られる。透明化という現象である。透明化というのは、松浦大悟によれば、日本社会はＬＧＢＴの人をいないことにする。もっと簡単に言うと、日本社会は性的少数者の存在を無視する。この現象の一つの例として、彼は日本の差別の例をあげ、このように述べた。

> 「差別がない」というふうに日本では言われるんですけど、それも微妙にニュアンスが、あの、違っていてですね。あの、まあ、確かに、あの、アメリカやヨーロッパのように、その家から追い出されて、若いＬＧＢＴがホームレスになったりだとか、あの、刺されて殺されてしまたりだとか、あの、暴力を受けて鼻が曲がったりということはないです。そこまでのひどい差別というのは。だけど、差別ではないんだけれども本音と建て前の中で、あの、透明な存在として、あの、いないことにされてしまうということがあるんですよね。
>
> （松浦大悟、2018）

つまり、日本のＬＧＢＴに対しての差別は他の国と違い、暴力的な差別ではない。それで、多くの人々は透明化という現象、いわゆる性的少数者の存在を無視することは差別として知覚しない。

カミングアウトすることの透明化

松浦大悟氏はこの透明化の具体的な例として、自分の体験をこのように述べている。2017 年に落選した後、個人のツイッターでカミングアウトをした。産経新聞はその松浦のツイッターのポストを使い、記事を書いた。しかし、その記事はインターネット記事だったため、秋田の多くの人々に伝えることができなかった。のみならず、多くの人々にこのようなこと言われる。

> で、だから、今でも、誰にも伝わってなくて、あの、皆知らないです。私はカミングアウトしたのが。知らないです。で、支持者の人でさえも、早く結婚しろって言って、あの、早く嫁さんもらえっていうんですよ。で、あの、選挙という

のは嫁さんとの二人三脚だと。嫁さんが票の半分をもってくるんだから、そういう、あの、立派な嫁さんをもらわなきゃだめだって言われるんです。

（松浦大悟、2018）

松浦氏は自分のアイデンティティーはオープンにしたかったが、多くの秋田の人に伝えることができなかった。その上に、お嫁をもらう必要があるという、彼の支持者の人も含み、そういう声が多い。もう一つ見られる点は、日本社会の文脈における結婚の重要さである。選挙に出馬する場合、男の人として「立派な嫁さん」がいると「票の半分をもってくる」。このことは、秋田はまだ古い伝統的な考え方、つまり男として、結婚しないと仕事ちゃんとできないという考え方が残っているということを示唆をする。松浦の場合は、結婚すると票が増えるということ言われた。

松浦氏は透明化の個人的体験したのではなく、政治家としても体験したことがある。以前述べた秋田の新聞が書いたように、大地震の時に、ＬＧＢＴの人は避難所から排除された。藤沢志穂子（2017）によると、『東日本大震災では、ＬＧＢＴが『気持ち悪い』といわれて避難所で排除されたり、ホルモン注射を処方してもらえなかったりといった問題が表面化した。』と述べている。このことについて松浦大悟氏に聞くと、参議院議員をやってた時国会でこの問題を取り上げたと言った。返事はこのようにもらった。

東日本大震災の時に、そのトランスジェンダーの人が排除されたという事例のことなんですけど、そのことについて私も、国会のなかで取り上げたんです。それで、当時民主党政権だったので、与党民主党として、これどうするのかということで、民主党の部会で、私が発言をしました。で、そうしたところ、「松浦さんちょっと黙ってくれませんか」と言われたのです。「今ね、あの、震災についての議論をしてるんですよ。ＬＧＢＴの個別の話してるんじゃないんです。国民の命がね、危機にさらされている時にそんな話しないでくれ。」っていわれたんです。

（松浦大悟、2018）

つまり、同性愛者はこのような問題がある時に、国会の中に松浦大悟氏のような解決方法を見つけるため討論しようとする政治家がいる場合も、無視される。なぜかというと、その時は「ＬＧＢＴの個別の話してる」ではなく、「震災についての議論をしてる」ところだったためである。このように、排除された人の事件は全体の事件ほど重要だと思われないため、国会で取り上げていない。

以上のことは、カミングアウトの難しさの一つの原因は透明化という現象を示唆する。松浦の場合は、カミングアウトをしても、多くの人はそのことを無視し、伝統的な考え方を表しつつ、お嫁さんの話をする傾向がある。のみならず、国会までもこの現象が見られる。LGBT に関する問題がある場合、政治家はこの問題について議論しようと言っても、答えは「そんなに大切じゃない」や「今はそいう話しない」という形になる場合は多い。

前述した、2015 年に行ったアンケート調査に戻ると、「社会の中で同性愛を見るとどう思いますか。」や「家族の中に同性愛者がいたらどう思いますか。」という質問に無関心な答え、いわゆる「構いません」や「分かりません」というような回答を選んだ回答者の割合は約 7 割を超える。この現象、LGBT の人の透明化の観点から考察すると、性的少数者はいないことにされたため、社会の中に一般的な人々に見られない。同性愛者や LGBT の人はテレビ、いわゆる遠い世界のことになる。つまり、一般的な人と関係ないことになる。この話題は自分の生活と離れているため、特に意見はないということである。

メディアに作られた同性愛者のイメージ

松浦大悟氏とのインタビュイーから見られるもう一つのカミングアウトの難しさを決める要素はメディアにおける同性愛者のイメージであると言える。筆者は日本は寛容な社会だと考えた一つの理由はテレビ番組の中にＬＧＢＴの人がよく出るためである。テレビ番組や映画などのみならず、以前述べたグラビテーションのような、様々なアニメの中にも登場する。そこで、松浦に日本のテレビ番組の寛容さについて聞いた。彼はこのように答えた。

それも、あの、何というか、日本独特の曖昧さというところがあって、あの、寛容なようであり、そうでないようでありというところが本当のところだと思うんですけど。あの、まあ、テレビに限って言えば、そのテレビ番組をよく見てもらえば、分かるんだと思うんですけど。あの、女装してる人だとか、トランスジェンダーの人はたくさんテレビに出てるんですよ。だけど、普通のストレートの男や女の人と同じ格好をしてるゲイやレズビアンの人ってほとんど出てないんですよね。それは、やはり、あの、日本のテレビが、その、ＬＧＢＴの問題を人権問題として捉えてないことの証拠なんですよね。

（松浦大悟、2018）

テレビに出る LGBT の人々は普通ではなく、テレビにでる性的少数者は女装をしている人の場合が多い。松浦がいうように、「普通のストレートの男や女の人と同じ格好をしてるゲイやレズビアンの人ってほとんど出てないんですよね。」という点のため、同性愛者のイメージはほぼメディアに作られるというと、一般的な人々の LGBT のイメージはそのテレビに出る女装をする人のイメージである。

文献の中に次のような日本のメディアの傾向が示された。McLelland （2000:46）によると「LGBT の男はテレビ番組に登場する時、女装しない時でも、他の方法で（行動やジェスチャーなど）女らしく見える。」ということ述べている。

松浦はこのような話をいった。自分の友人、LGBT の人はあるテレビ番組に参加した。松浦の友達は特に女らしい行動はなく、普通の男の人である。しかし、テレビに出た時、自分の普通な行動は面白くないため、番組を制作する人に、自分の動きはもっと女らしくしてくださいということ頼まれた。後は、『「あなたはゲイなのになんでおねえ言葉喋らないの」と逆に言われたんです。で、迷惑だという人も多いんですよね。』という点もある（松浦大悟、2018）。

このように特に女らしくない、普通の LGBT の男の人、後は男らしくない、普通の LGBT 女の人はカミングアウトしたい場合、自分は周りにおけるイメージと違うため、カミングアウトしづらくなる場合も多い。

さらに、最初の調査に戻ると「同性愛者という言葉についてどこから初めてききましたか。」という質問がある。この質問の一つの答えは「映画かテレビ番組」であり、その答えを選んだ人の割合は 62％に達する。半分以上の回答者は同性愛者のイメージはテレビから最初影響をえている。それで、周りの人の感知このイメージに影響される。自分の周りの友達や家族は LGBT である場合、その「女装や男装する人」のラベルを付けて、その人々をもっと深く理解しようと努力しない。そこで、カミングアウトをしない方がいいと思ってしまう LGBT の人の場合は多くなると考えられる。

歴史の影響

では、テレビ番組の女装している人に対しての寛容さの原因を挙げると、日本の歴史を見る必要がある。日本の歴史では、江戸時代に歌舞伎や能の演技で女は参加するのは違反になり、その演技の中の女の役割は女形をする男の人をした。その文化の影響について論じると松浦大悟氏はこのように言った。

> 先ほどの日本社会には差別がないんじゃないかという話にも繋がるんですけど。日本は昔から、そういう同性愛者に寛容な社会だったんじゃないかということを言う人がいるんですよね。それも誤解というか、勘違いで、実はＬＧＢＴというのはその人権問題であって、それは西洋から入ってきた考え方なんですけど。昔から日本にある、その、同性愛寛容だ、それは男色文化のことを指すんです。それはＬＧＢＴとは全く別ものであるんですけど。文化と人権問題としても、同性愛というのは、やっぱり切り離して考えなきゃいけないと多くのひとが思っていて。
>
> （松浦大悟、2018）

松浦氏は日本はそういう文化があるため、元々寛容だと思う人は多い。それで、積極的に人間権利を守る強い必要性はないと考える人が多いのではないかと述べている。

松浦大悟氏とのインタビューの内容は、日本社会ではカミングアウトするのは難しいということを示唆する。それはなぜかというと、まずは、カミングアウトをする場合も

LGBT の人々は透明される。つまり、いないことにされる。のみならず、問題がある時その問題は国会で取り上げられない。

このカミングアウトするの難しさのひとつの原因はテレビやメディアにおける LGBT のイメージである。いわゆる、LGBT の人々は普通の人として映られない。むしろ、面白いキャラクター、または女装や男装をしている人のイメージが付けられる。もう一つのカミングアウトの難しさの原因は女装をしている芸能人の古い文化である。もう一つの要因は多くの人は男色と LGBT の差を分からないことである。日本はそういう歴史があるため、社会の寛容なイメージ広がり、社会を変わる必要性は感じられない傾向がある。

６．結論

本稿では、ＬＧＢＴの政治家の松浦大悟氏へのインタビューをし、日本社会におけるＬＧＢＴに対する態度を考察した。その結果、最初は日本社会は寛容だと考えたが、インタビューした以降は日本における現実はそうではないことが明確になった。のみならず、寛容に見えた理由も明らかになった。

まずは、日本社会は寛容なのかどうかという点である。 松浦大悟とのインタビューは日本社会におけるいくつかの傾向を示す。一つ目は、日本社会、都会でも田舎の文脈でもカミングアウトは難しい。つまり、日本社会は寛容ではなく、家族や友達など周りにいる人との関係が切られることや仕事を辞めさせることなど、差別のケースが非常に多い社会に寄与する。

この難しさの原因として、ＬＧＢＴの人の透明化と性的少数者のテレビが作ったイメージだということが分かってきた。つまり、透明化は、同性愛者はカミングアウトをする場合、または、問題がある場合、日本社会にいないことにされる。簡単にいうと、ＬＧＢＴの人とＬＧＢＴの人の問題は無視される。

性的少数者のテレビが作ったイメージというと、ＬＧＢＴの人は女装または、男装をしている人として見られる。他の言葉でいうと、普通のゲイやレズビアンの人はテレビに出ない傾向が見られる。

次に、日本社会は寛容に見えた理由は、まず日本の古い男色の文化と、後は日本の独特な差別だと明らかになった。つまり、日本は江戸時代から芸能の中同性愛者のイメージ現れたため、または日本の差別は暴力的な差別ではないため、日本社会は寛容だと思われる人が多い。

以上の結論は、現在の日本社会における同性愛者の困難な状況を示唆している。本稿により得られた知見は、日本社会の特定な差別、いわゆるＬＧＢＴの人の透明化という現象を発見するというてんで新しい。しかし、本稿の分析は日本社会の状況の原因を細かく調査することできなかった。ＬＧＢＴの透明化を起こる理由については、更なる研究する必要である。この点については今後の課題としたい。

参考文献

薬師実芳・笹原千奈未・古堂達也・小川奈津己（2014）『LGBT ってなんだろう?--からだの性・こころの性・好きになる性』合同出版.

Butler, Judith (1999) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.

Coleman, E.J. and Standfort, T. (2005) *Sexuality and Gender in Postcommunist Eastern Europe and Russia*. New York: Routledge.

Herzog, Dagmar (2011) *Sexuality in Europe: A Twentieth-Century History*. Cambridge University Press.

Hideko, Abe (2010). *Queer Japanese Gender and Sexual Identities through Linguistic Practices*. Palgrave Macmillan.

McLelland, Mark J. (2000) *Male Homosexuality in Modern Japan Cultural Myths and Social Realities*. Richmond: Curzon Press.

関連 Web サイト

藤沢志穂子（2017）『元国会議員がＬＧＢＴ告白「小池百合子代表の了解は得たが…」選挙でカミングアウトできなかったワケ』（産経ニュース）
https://www.sankei.com/smp/premium/news/171201/prm1712010002-s3.html

永易至文（2016）「日本における性的マイノリティーの受難」（nippon.com）
https://www.nippon.com/ja/currents/d00253/

松浦大悟（2018）https://twitter.com/GOGOdai5/status/1018759021040316416

先行研究

トマアンドラ・デゥミトレスクアンドレエア・カリンローラ・トアデルラウラ・バニカロレナ・アマルギオアイレディアナ（2015）「同性愛者について日本人の意見」ブカレスト大学の二年生の日本語のコミュニケーションの授業発表資料

添付資料

同意書

この度は、LGBT についてのインタビューにご協力くださり、ありがとうございます。このインタビューは秋田大学の文部科学省の日本語文化研究修正が行っているものです。インタビューによって、現在の日本における LGBT に対しての状況を明らかにしたいと思っています。

研究にご協力いただける場合、インタビューを IC レコーダーを用いて、音声に収録させていただきたいと思っています。音声ファイルを文字化した資料を論文・研究発表などで用いて、完成した論文は秋田大学のホームページに掲載させていただきたいと思っています。